

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red  
Cross Kyushu International College of  
Nursing

「赤十字概論」の授業がめざすもの：  
赤十字看護教育への示唆を求めて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): 日本赤十字看護教育, 赤十字概論, 災害看護, 国際人道法 キーワード (En): 作成者: 山本, 捷子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000109">https://doi.org/10.15019/00000109</a>

著作権は本学に帰属する。

# 「赤十字概論」の授業がめざすもの

— 赤十字看護教育への示唆を求めて —

The Aim of Introduction of the Red Cross  
for Nursing Education of the Japanese Red Cross

山本捷子  
Shoko Yamamoto

日本赤十字九州国際看護大学教授  
The Japanese Red Cross Kyusyu International College of Nursing

## 要約

開学以来、筆者は「赤十字概論」と「災害看護学」の授業を担当し、併せて本学の「大学研究助成」を受けながら、「赤十字看護教育」と「災害看護」について研究検討してきた。筆者なりの考察の結果、「赤十字概論」において本学の建学の精神「人道」や「国際赤十字・赤新月運動の基本原則」の教授／学習を通して、専門である看護学の基盤としての人間的態度、看護実践への指針を得ることができ、さらに、赤十字看護教育を特色づけるものとして、災害看護と結びつけた教育に発展することを目指したい。

Key Words : 日本赤十字看護教育、赤十字概論、災害看護、国際人道法

## はじめに

日本赤十字社が1890年に救護看護婦養成を開始してから今日まで115年、その前半の第二次世界大戦終戦までは、我が国での組織的看護婦養成と看護活動における先導的地位にあった。しかし後半の戦後60年間の社会と看護界の変化は著しく、日本赤十字社（以下「日赤」と略す）の看護教育は遅ればせながら追従してきた。殊にこの20年ほどの間に看護教育の大学化は加速度を増し、社会の少子高齢化・国際化が急速に進展する状況の中で、日赤看護教育は「我々の独自性は何か」を求めて迷走状態にあるように思われる。

本学は開学して5年目であるが、その教育の理念、教育目標には一点の疑義を挟む余地のないほど、赤十字看護教育の教育理想と方向性を示している。しかし、その表現は理想的、抽象的である故に、実現において多くの問題や課題を含んでいる。問題の所在を考察

しようとするとき、その視点は自己点検・大学評価基準の項目とも一致するが、社会の医療福祉看護職に求める機能役割の変化に対応したカリキュラム編成、授業方法・臨地実習教育とその環境、学生の学力や資質、教員の質・能力・指導体制、それらを支える運営組織・経済基盤など、問題点・課題は複雑に輻輳し、小論では到底応えうる力はない。

しかし喜ばしいことに学校法人赤十字学園では、2004年度より系列大学の碩学を集め「赤十字教育のありかた」が検討され始めた。学内においても出来る限り早く教授会やプロジェクトチームで、またFD研修を通して検討されることを期待したい。

筆者は、本学の開設時から赤十字概論と災害看護学の授業を担当している者として、また看護歴史や災害看護の研究を通して蓄積した知見をもとに、赤十字・災害に焦点を当てた日赤看護教育について、主観的ながら私見を述べてみたい。本稿では、赤十字概論は赤十字教育の基礎であり、それを支える柱であるという前提の元に以下のことを検討してみた。

なお、本稿は本学の開設時から設けられている「大学研究」助成の研究報告書を改変した。

## 1. 「赤十字概論」という科目の意義

本学の教育理念・教育目標は、「赤十字の理念を理解して、その思想を看護実践活動の中心に据えることのできる人を育てる」と言い換えることができる。これを実現するためのカリキュラムには直接的な科目として「赤十字概論」が設けられている。この科目は、私学の重要な基盤であり柱ともなりうる。

ただし、赤十字概論は建学の精神や概要を学ぶ科目として、入学初期の1年次に開講されることが多く、また講義では一定の知識注入に陥りがちであるが、その知識が血肉となり、実現化されるかは、「赤十字概論」の授業方法の工夫と、その後続く計画的な教科目学習と無意図的教育のあり方次第で左右される。

## 2. 「赤十字概論」の教授／学習目標

赤十字概論の主要な教授／学習目標は次の4点に集約される。

- (1) 赤十字の発祥と変遷をその背景と併せて理解し、赤十字の理念を現代の社会問題と関連づけて考察する。
- (2) 赤十字の理念「人道」と、「国際赤十字・赤新月運動の基本原則」を自分のことばに置き換えて理解する。
- (3) 赤十字の理念を理解するために「赤十字社の組織的活動」の実際を知る。
- (4) 赤十字の理念と看護の本質とを関連づけて、看護実践のあり方や自分自身のあり方として考察し、学習の方向性を見いだす。

これらは、赤十字で学ぶ人にとっては、1年次であれば赤十字概論の教授／学習目標であり、卒業時までには学ぶべき学習目標でもあり、また卒業においても自己啓発の継続学習あるいは現任教育の学習内容といえるだろう。

ここで困難な点は「赤十字の理念」や「看護の本質」などの抽象的な概念が並ぶことである。この抽象性は哲学的で理解し難く、しかも個人により、時代によっていかようにも解釈されるために、「赤十字とは何か？」について答がなかなか導き出されにくいのである。

その為に、赤十字の発祥から現代に至るまでのさまざまな活動のエッセンスとして、赤十字の理念を抽出しておくことが必要である。また「国際人道法」の理解も重要な要素であるために、現代の世界情勢と関連させて「平和と戦争」と赤十字を考えさせたい。

### 3. 赤十字の発祥と理念の理解のための教授内容

そもそも、赤十字の戦時における組織的救護活動は1859年イタリアの地におけるアンリ・デュナンの人間的な体験を契機として始まった。その体験は1862年に「ソルフェリーノの思い出」<sup>1)</sup>に生々しく記述されているので、必読書としたい。

この單元では創始者アンリ・デュナンの生涯と業績を知ることにとどまりがちだが、19世紀半ばのソルフェリーノの戦いの中から「中立的団体と救済事業」を発想した背景を理解することが重要である。例えば、デュナンがクリスチャンであって実業家というプロテスタンティズム、スイス・ジュネーブという彼の生地の地理歴史的特性（宗教改革の本山・政治的永世中立性）や、当時の国際情勢（イタリア統一戦争、フランス第二帝政時代、イギリスのビクトリア朝時代など帝国国家主義が台頭する時代）を背景にして人道主義（ヒューマニズム）が受け入れられる近代化の入り口にあったという時代<sup>2)</sup>の特性も併せて紹介すれば理解を容易にすることが出来るであろう。

「ソルフェリーノの思い出」で最も強調すべきは「戦争のとき負傷兵を看護することを目的とする救護団体を平和で穏やかな時代に組織しておく方法」と、「国際的な協約」を提案したことである。それが現実化した後の赤十字の発展に関する要点、すなわち5人委員会／赤十字国際委員会、ジュネーブ条約、各国赤十字社の創設、国際赤十字・赤新月社連盟の結成と活動などの歴史の変遷および現代の国際赤十字の組織・機構・活動については、国際情勢の変化を背景とともに十分に理解させたい。さらに赤十字活動の限界や現代の赤十字運動の重要性を考察させるためには、国際政治経済学・疫学・災害看護学などに関連づけることが必要である。

私は、「赤十字社は人道という理念を基盤に世界的に活動する組織」であり、「赤十字は宗教ではなく、人類の普遍的な思想である」ととらえている。赤十字が人間の命や健康を破壊する「戦争」の中から生まれてはいるものの、「人道」という人間の根本的なあ

りようを求めている「人間の営み」であることを本質にしている点を強調したい。

#### 4. 赤十字の理念「人道」と「国際赤十字・赤新月運動の原則」の理解のために。

まず、赤十字のバイブルと言われる J.S. ピクテ著「赤十字の諸原則」<sup>3)</sup> を読解する。少なくともこの本のマックス・フーベルによる「序文」、ピクテの「まえがき」から序論、第一部「人道」は必読にしたい。この著書はなかなか難解ではあるが、J.S. ピクテが哲学的なことばで赤十字活動の原則を公約的にまとめたものである。赤十字に関わり、その相続人となる者は、赤十字の本質や理念を理解するために繰り返し読み、沈黙考し、実践に移す座右の書として熟読したい書物である。

ピクテの「赤十字の諸原則」は、検討が重ねられ、1965年ウィーンの第20回国際赤十字会議で「赤十字の基本原則」となり、1986年第25回国際会議において「国際赤十字・赤新月運動」のスローガンに改訂されている。

「国際赤十字・赤新月運動の原則」、いわゆる7原則「人道・公平・中立・独立・奉仕・単一・世界性」は、単にお題目として覚えたり、呪文のように唱えるだけになってはならない。7原則は赤十字関連の書物には必ず記述されているが、赤十字の特性として理解するだけでなく、日常生活や人間の行動の鑑として、自分のことばに置き換えて、理解し身に付け、具現化できるようになることが最終目標である。

その学習方法としては、「どのような行動が人道的といえるのか、どのようなことが人道に悖る（反する）のか」というようなテーマで、学生個個人が身近な生活体験を例に話し合うとよい。最近の生活体験の乏しい学生にとって「人道」から入るのは困難な印象が強い。そこで、「いつでも“人間が人間らしく生きる”ために」とか、「“平和で健康的な暮らしを維持するためには”等と平易なテーマに置き換えると理解しやすいだろう。教授側としては、ピクテの「赤十字の諸原則」を参考に、『人類に対する積極的好意の感情』、『エロス・アガペ・隣人愛』、『善きサマリア人』、『人道の実現をはばむ4つの敵』などを、自分のことばで解釈しておくことが肝要である。カステリオーネの婦人達の合言葉『Tutti fratelli (人類皆ともだち)』も、平易な言葉ながら、深めたい言葉である。

#### 5. 「赤十字社の組織的活動」の実際を知るために

学内外に数多くの赤十字社の組織的活動の体験者が存在し、講師に不自由することがないのは、日赤看護教育機関の強みである。殊に国内外で頻発する自然災害救護、ICRC関連、開発途上国との二国間協力事業等に関する体験者、また国際人道法の研究者などに依頼するが、講義のポイントを示して授業計画することが望ましい。

画像を用いて紹介される体験談に接することは、学生にとって新鮮で共感を得やすい。

しかしその反面、感動的に捉えがちであるが、その行動の根拠である制度や思想なども理解させるなど、その場で終わらないような要点の整理にも配慮したい。

この学習は、その後の専門基礎分野の国際関係科目や国際看護学・災害看護学でブラッシュアップし、課外活動としてボランティアの機会やサークル活動など、学生自身が体験する学習へつないでいくことが大切である。また今後は、災害・国際分野でより専門的に活動研究する修士課程を開講すること、あるいは看護職だけでない赤十字の関連の研究所開設など、さらに専門看護領域分野へ発展することを期待したい。

## 6. 赤十字の理念「人道」と看護について

赤十字の理念と看護の関連を考えるために、まず、『人道の実現を阻む4つの敵』<sup>3)</sup>を自分なりに解釈してみる。

その一つ『利己心』は自己中心的で憎悪、羨望、攻撃性等を生むもので、他者への愛(アガペ)は生まれにくい。もとより看護はクライアント/患者/対象者に対する援助行為であり、“その人のために”行われてこそ、看護といえる。

次いで『無関心』は、言い換えればネグレクト、無視である。「人道」は他者へ関心を持つ主体性から出発し、自発的なボランタリー性(奉仕の心)を生む。

3番目の『想像力の欠如』とは、相手の思いや感情、痛みや苦痛を思いはかること、共感性のないことである。援助には、これなしでは相手の真のニーズに合致せず、かえって迷惑あるいは害にさえなってしまうもの。

最後の『認識不足』とは、相手がどのような状態にあるかを客観的にキャッチする力のないこと。専門的な看護は、現象を観察し、どのような原因や状況で生じているかを判断し、適切な看護行為を選択して実施し、この後に生じる変化を予測、結果を評価するという一連の知的な活動である。

このように見ていくと、「人道の実現」と「看護実践」は同じ感性、思考、態度を基盤としていると言える。すなわち看護者の基本的態度と実践は、人道の実現に他ならない。

さらに「赤十字運動の七原則」の人道をのぞく6項目について看護的解釈を試みる。

- ① 公平：看護の対象者に対して、ケアの必要性を判断し、実行する際に、よく相手や状況を見抜き、知り、どのように遇したらよいかを客観的・冷静に考えることが必要で、アセスメントにおける<客観性>の重要な点である。
- ② 中立：対立するどちらの考えにも偏らないこと。好き・嫌いの感情ではなく、対象の状態に応じて、判断を下し技術を提供する。
- ③ 独立：自分自身の考えをしっかりと持つこと。協働者のそれぞれの立場や意見をよく知り、判断する。<自律Autonomy>が育まれ、看護者としての主体性をもち、適切に自己主張・アサーティブネスに実行する力が求められる。

- ④ 奉仕：自発的、主体的に行動を起こすこと。損得勘定や名誉を求めることなく、相手の意志を尊重する謙虚さを持ちあわせること。自分の行動を選択する基準として「相手に善いことか、相手を害することか」を判別する冷静さも必要である。そこでは行動への意欲や熱意とともに人格の成熟が必要になる。
- ⑤ 単一：主体的な一貫性のある信念をもって行動することと言い換えたい。善かれと思うことは進んでいく意志の強さであろう。しかし、チーム活動の場合、独断専行でなく、分担を了解し、さらに協調性をもって行動することが求められる。
- ⑥ 世界性 Universality：普遍的価値観に基づいて行動する。地球的規模でものごとを考えること。それは歴史的・時間的流れの中で物事を考えることでもある。

赤十字人であれ、看護職であれ、これらを完璧に備えることは至難のわざである。エキスパートへの努力目標、あるいは限りなき人格の止揚への啓示として、自らの向上目標としたい。そして日々の研鑽の中に、初学者からベテランまでの教育目標として、工夫・開発に努めるべきことである。

このように赤十字運動の七原則は看護実践の方向性、あるいは指針とすることが出来る。赤十字概論は看護の原点として捉えることができ、赤十字看護教育の特性のひとつであるといえる。

## 7. 赤十字看護教育の特色としての災害看護

看護は「人間の命を守り、苦痛の軽減・健康回復・健康増進への援助」である。人間の健康を損なう原因は何であれ、看護は古今東西、医療臨床・在宅・地域という生活の場、文化背景の違いはあっても世界のどのような地域にも共通する活動である。

災害という現象は天然、人為的という原因の違いを問わず、人間の命を脅かし、生活と健康破綻をもたらす、多数の人々に同時期に一齐に大きな苦痛をもたらすという特徴を持つ。赤十字社はそこに着目して組織的救護活動をする団体であること、その責務に応えるということに日赤看護教育はもっと強く認識すべきではないだろうか。

そこで、看護教育と災害看護はどのように繋がる事が出来るか、試案ではあるが考えてみよう。

- 1) 看護が医学の補助者である限り、医学が追求してきた病気を看護の根拠と考えざるをえない。「災害」は、人間の健康障害をもたらすものであり看護の必要性を導き出す原因・根拠とする発想の転換が必要である。そのためには、さまざまな種類の災害によって異なる健康障害についての知見の集積が必要となる。
- 2) 災害時の特殊な看護技術は、救急救命・蘇生法、緊急・災害時トリアージや状況のアセスメント能力であるが、瞬時の情報が少ない中での判断能力や、物品や人手が十分でないときの臨機応変に応用する能力、節約や工夫を考える能力が災害初期には必

要である。さらに災害サイクルの進行に対応する技術は、医療技術・生活援助技術だけでなく、教育・コンサルテーション・機関調整など、今まで以上の高度な能力の育成が必要になる。

- 3) 災害の緊急場面に限ってみても対人関係は専門職だけではなく、一般の人・ボランティア・被災者を巻き込む。災害サイクルの進行にそって、あるいは赤十字関連の国際的な場で活動するためには、柔軟性・包容力のある大きな管理能力、主体的判断能力、リーダーシップ能力等も重要な要素となる。

「こころのケア」が重要視される 21 世紀である。赤十字看護教育機関こそ、その場面にふさわしい態度・能力を備えた人材を育てる責務は大きい。

- 4) 大学・短大の基礎教育課程では、通常の看護能力育成が優先されるが、将来において活動する場面を予期するためにも見学や経験的な学習は必要であろう。現在の保健師助産師看護師法のもとの基礎教育で、どこまで「災害看護」の能力が育成できるかは疑問である。「災害看護」をコアとするカリキュラム編成や、より高度な専門性を追求した大学院レベルの教育が必要になる。

おわりに

私学の建学の精神とは、その学校の教育基盤であり、教育の成果として、どのような人材を輩出するかを端的に示すものである。1 年次に開講する「赤十字概論」の教授／学習は、赤十字と看護の学習への入り口である故に、本学で学ぶ喜びや誇りを感じ、方向性を見いだして欲しいという願いと、その後の学生の生きかたや価値観形成に影響をおよぼすものかもしれないというような重荷を感じる授業である。

教育の成果は、授業直後や卒業時に測定するようなレベルで顕れるものではない。カリキュラムを初めとする計画的教育と、日常的な学生と教職員や学生同士との関わり、物理的学習環境や校風などを総合した無意図的教育とが統合された結果として創りあげられるものである。学生が学ぶ「赤十字概論」以上に、赤十字への理解と赤十字の理念を体現化する大学の教育の有り方が問われ、たゆまない改革への努力を続けたいものである。

なお紙数制約のため、本稿には「赤十字概論」授業内容全部を網羅していないことをお断りしたい。特に日本赤十字社に関しては記述していない。

#### 【引用・参考文献】

- 1) アンリ・デュナン、木内利三郎訳「ソルフェリーノの思い出」日赤会館 1969 年初版、1987 年第 10 版
- 2) ピクテ J.S. 井上忠男訳「国際人道法の発展と諸原則」日赤会館 1983 年 p.53
- 3) ピクテ J.S. 井上益太郎訳「赤十字の諸原則」日本赤十字社 1958 年初版、2002 年 18

版（特にp.1～38は必読）

【参考文献】

- ・ アンリ・デュナン他、太田成美訳「赤十字の源泉を求めて—エピソードでつづる赤十字の心—」日本赤十字社 1999年
- ・ フランソワーズ・ボリ、太田成美訳「国際人道法入門」蒼生書房 1992年
- ・ 小池政行「国際人道法～戦争にもルールがある～」朝日選書692 2002年
- ・ 井上忠男「戦争と救済の文明史—赤十字と国際人道法のなりたち」PHP新書 2003
- ・ 榊居孝「世界と日本の赤十字」株式会社タイムズ 1999年
- ・ 「日赤のてびき」刊行委員会編「増補 人道—日赤のてびき」蒼生書房 1991年
- ・ 吉川龍子「日赤の創始者佐野常民」吉川弘文館 2001年
- ・ 亀山美知子「近代日本看護史日本赤十字社と看護」ドメス出版 1984年
- ・ 金井悦子・山本捷子「21世紀の日赤看護教育への提言—災害看護学の確立へ向けて」日本赤十字武蔵野短期大学紀要第10号 pp.25～33 1997